

遠隔会議システムによる「話し合い¹」の談話構造分析

— 台日接触場面におけるグループ・コミュニケーションの分析を中心に —

施信余

(淡江大学日本語文学系 助理教授)

1. はじめに

文化を異にする者同士のコミュニケーションにおいて、双方がもつ違和感や誤解を対象として多くの研究が行われ、その原因の一つとしてフレーム (Frame) の存在が指摘されている。フレームとは、言語活動に対する期待が構造化されたものを指す。我々は自分が所属している言語・文化集団により独自のフレームを形成しており、無意識のうちにそれらを参照して言語行動を行っているという。語彙や文法などとは異なり、フレームによって引き起こされた問題の多くは当事者にとって「理由のわからない苛立ち・不完全感」として残ることが多い。特に目標言語習得途上の学習者にとって、それはクリアしにくい問題であろう。異文化間のこの種のギャップというのは、一方が他方に合わせるということでは解決すべきものではなく、互いに相手のやり方に理解を示しながら、自分のやり方も認めてもらうという性格のものであろう。したがって、このような問題を解決するには、学習者の目標言語及び自分の母語のフレーム、さらに接触場面の実態を明らかにすることが必要だと思われる。

本研究では、接触場面における日本語によるグループ話し合いに焦点を当て分析する。グローバル化が進む中、学校、職場や地域において言語文化を異にする者同士の小集団によるグループ話し合いが頻繁に行われるようになり、その重要性は増してきている。ここでは、遠隔会議システムによるグループ話し合いはどのように作り出されているのか、実証的に探る。

¹ 本研究ではある結論に至るための談話ではなく、雑談に近い談話を対象としている。

2. 先行研究

Watanabe (1993) は日本語母語話者と英語母語話者による母語の討論場面を比較し、それぞれの母語フレームを探った。その結果、日本語とアメリカ英語によるグループ討論のフレームは、日本語母語話者グループは英語母語話者グループよりも①討論の手順や形式をめぐるやりとりに時間をかけること、②討論中の論の展開は普段の日常会話と差がないこと、③複数の論点や立場から討論に参加すること、の三点において顕著な違いがあることを指摘した。

陳 (2002) はグループ討論を対象に、台湾と日本の母語フレームの対照研究を行い、「討論の開始部」「テーマ間の移行」「ポーズ」「発言順番と進行役」「トピックの転換」「討論の終結部」の六つの側面から両者の特徴を提示した。その結果から、両者のグループ討論フレームを「内容重視で個人単位」の台湾、「形式重視で集団単位」の日本として特徴付けている。

このように日本語とは対照的な母語フレームを持つとされる台湾華語母語話者が日本語で日本語母語話者とグループ討論を行う際、どのように討論に参加するのだろうか。先行研究は母語フレーム間の対照研究が多く、接触場面を対象とした実証的研究はあまり行われていない。本研究では、陳 (2002) の研究を踏まえ、日本語母語話者と日本語学習者によるグループ話し合いの談話構造の分析を試みる。

3. 研究方法

3-1 分析データの説明

分析の対象とした遠隔会議は、学生主導の遠隔会議プログラムであり、アジア四大学²をインターネットで結び、学生同士が忌憚なく意見を交換することを目的に、2002年から継続中の実践授業³である。

² 台湾の淡江大学、日本の早稲田大学、慶応大学及び中国の北京大学の四大学である。

³ 本会議への参加は、正規授業の一環として実施する学校もあるが、筆者が勤務する淡江大学では、課外活動として実施している。リアルタイムの遠隔交流には高度な言語能力が

日常的なテーマ⁴について学生に意見交換の場を提供し、アジアの青年の相互理解を促進すると同時に、学生主体の会議運営と会議討論に必要な言語運用力を向上させ、母語及び目標言語による発信力を高めることが実施の目的である。

本研究は、筆者が淡江大学側の会議支援教師を担当した期間中（2009年10月～2011年1月）合計七回の日本語会議を分析対象とした。一回につき、およそ一時間である。また、会議の様様をすべて録音、録画した。以下では、その七回分の遠隔会議の詳細を述べる。

【開催日程及びその概要】（全七回）

日時	テーマ/サブテーマ	参加校	司会校
2009/11/12	<u>いじめ問題</u> ・中国にいじめ問題はあるか。 ・いじめに対する周囲の対応 ・インターネット上のいじめ	早稲田 慶応 北京 淡江	慶応大学
2009/12/10	<u>クリスマス</u> ・クリスマスはどのように過ごすか。 ・誰と一緒に過ごすか。 ・自国では、どんな時、若者は共に過ごす相手がいないと特に寂しく感じるか。	早稲田 慶応 北京 淡江	早稲田大学
2010/05/13	<u>上海万博</u> ・自国のパビリオンの特色は何か。 ・万博の開催は、実際人々の生活にどのような影響を与えていると思うか。 ・行ってみたいと思うか。特に関心のあるパビリオンは？それはなぜか。	早稲田 北京 淡江	淡江大学
2010/05/27	<u>カンヌ国際映画祭</u> ・最近注目されている映画	早稲田 北京 淡江	早稲田大学
2010/10/28	<u>アジアミュージックステーション</u> ・各地の代表的、流行っている音楽の紹介 ・各地の音楽を聴く習慣と特徴	早稲田 慶応 北京 淡江	淡江大学
2010/11/25	<u>「草食系男子」現象</u> ・司会校による「草食系男子」及び「草食系男子」の日本での評価に関する紹介 ・自国の若者が付き合う相手を選ぶとき重視する条件 ・「草食系男子」や「肉食系女子」などの新現	早稲田 北京 淡江	早稲田大学

必要とされるため、日本語学科学部四年生のうち、特に交換留学経験者を優先させた。
4 司会校が「四校が共通の関心を有すると思われる話題」という前提のもとに討論テーマを決め、ほかの参加校に知らせる。また、会議の進行がスムーズになるよう、それぞれの話題についてまとまりのある意見が言える程度の準備をしてくるよう指示した。

	象に対する考え方		
2010/12/09	クッキング・ママ ・料理の紹介と作り方の紹介 ・料理にまつわるカルチャー・ショックの経験談や、印象に残ったおもしろい異国料理 ・他に食べ物に関連する話題	早稲田 慶応 淡江	淡江大学

3-2 分析の観点

グループ話し合いの談話構造は話し合い全体との関わり方から、話し合いの骨組み・構造を対象とするものと話し合いの内容を対象とするものと、大きく二つに分類することができる。本稿では、話し合いの骨格と考えられる構造、具体的には「話し合いの開始部」「サブテーマ間の移行」「話し合いの終結部」にしばって分析を行う。

4. 結果と考察

4-1 話し合いの開始部

例1	
TM	それでは今日のテレビ会議を始めたいと思います。 みなさん、聞こえますか。
KM	はい。
WM	はい、聞こえまーす。
TM	ありがとうございます。 はい、それでは始めましょう。 今日はミュージックステーションをテーマとして、音楽によって文化交流していきたいと思います。 それでは、今回、テレビ会議の目的として、二つ、あります。そして、一つは文化交流で、あの、そして二つ目は意見の交換です。 そこで、あの、今日はとても改まった会議ではありません。あのー、敬語とかは使わなくてもかまいませんです。 えーと、そしてもう一つの目的は、それぞれの発言のチャンスがありますようにゆっくりというペースで行きたいと思います。 あの、お話しするスピードはこれで大丈夫ですか。

司会者である TM は、開始後直ちに討論内容について話し合うのではなく、会議の目的やセッティングが万全であるかの確認をしてから討論内容に入った。

4-2 サブテーマ間の移行

例2	
TM	あのー、今、あまり時間がないので、ちょっと次のステップに入りたいと思います。ありがとうございます。

「言い淀み」「理由説明」が「クッション」に相当する部分であり、これらは移行によ

って生じる中断がもたらす一時的緊張を和らげる機能を果たしていると考えられる。

例 3	
PF	(前略) その理由でこの曲を選んだんです。
TM	そうですか。ご紹介、ありがとうございます。
	みんな音楽を聞く習慣は、どうですか。

移行の手順が少なかったから生まれた唐突感。目下討論しているテーマについて結論が出たと自分が判断を下したら、直ちに次の新テーマへの移行を提示する。

4-3 話し合いの終結部

例 4	
TM	はい、それでは今日は、みなさまのご意見は、活発なご意見を、あの、ありがとうございます。
KM	はい、では。
皆	[拍手] ありがとうございます。
TM	音楽についての話は、またこれからの会議で、チャンスがあれば、また、みなさんと、また討論したいと思います。はい。ありがとうございます。
皆	ありがとうございました。

ほかの参加者の同意を得てから、参加者の協力を得て討論を終結する。

5. おわりに

本研究は接触場面における話し合いを対象に検証を行い、日本語学習者の討論形式は母語の討論形式より目標言語である日本語の母語話者による討論形式の影響が比較的強いということが示唆された。今後、参加者の多様性や他者への配慮がコミュニケーション構造との関連性も考慮し、より洗練された分析の枠組みを作り出していくとともに、参加者同士のやりとりをよりダイナミックに捉える必要があるだろう。今後の課題としたい。

参考文献

- 施信余 (2010) 「遠隔接触場面における多地点間インターアクション—台湾・日本・中国間のアクセス事例から—」『淡江日本論叢』22号、119-140.
- 陳明涓 (2002) 「フレームに見られる文化的差異—台日大学生によるグループ討論の場合—」『人間文化研究年報』26号、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科、39-46.
- Watanabe, S. 1993. Framing in Discourse: Cultural Differences in Framing: American and Japanese Group Discussions. Tannen, D. (ed.) Framing in Discourse. New York: Oxford University Press. 176-209.